

自由門 優良賞「方言コンプレックス」

文学部日本文学科 2 年 1 組 吉田 風沙

「なぎって広島弁使わないよね。標準語みたい。」

昔、友達からこの言葉をよく言われた。悪いことではないと分かっているけどなんだか「広島県民なのに広島弁を使わないなんて変だ」と非難されているように私は聞こえた。自分では広島県民だし無意識に使っているだろうと思っていても周りの友達はなぜかそう言う。たいしたことではないが、私はそれに疎外感を覚えた。その言葉を言われた後はなにかと「ぶち」と「じゃけん」を使って方言を使うアピールをした。

だから私はあまり広島弁が好きではなかった。広島弁というより方言が好きではなかったかもしれない。「広島弁使わないよね。」と言われるのが嫌だった。そう言われ始めた頃、私は思春期でなにかと人と一緒に良いと思っていた。自分ではみんなと同じと思っていても違うと指摘されるととても怖い。話し方はそう意識して変えられるものではないと思う。一時的に変えられたとしてもずっと続けるのは無理だろう。気づいたら元に戻っているはずだ。広島に住んでいるから広島弁を使うというレッテルが私にはとても窮屈だった。広島弁がかわいい方言ランキングに入ったり、怖い方言ランキングに入ったりしてもどこか他人事のように思えた。

大学では他の県から来た子も多く、そんなに目立っていないためか「広島弁使わないよね。」とは言われなくなった。私の所属している文学部では方言の授業があった。その授業ではプリントに書いてある方言会話をひとりひとり音読する。私が「かーくんどしたん？」というところを音読すると先生が

「吉田さん、上手ですね。とても広島弁のイントネーションです。」

と褒めてくださった。この時、「あ、自分もちゃんと広島弁使えているんだ。」ととてもうれしく思ったのと同時にほっとした。広島弁は標準語より一つ後ろにアクセントがくるらしい。私は「し」の部分の音が高かった。標準語では「どうしたの？」と言うため、「どーしたん？」という言い方になり「ど」が高くなるのではないだろうか。自分の話し方が広島弁だと言われたのは覚えている限りこれが初めてだった。

講義の中で普段意識せず使っている広島弁が数多くあることを知った。例えば、「ぬくい」「たわん」「はぶてる」「のいて」「みやすい」など。私はこれらが広島弁だと大学生になるまで知らなかった。また、自分が聞いたことがない昔の広島弁も習った。「チガガデ

ル」「ホボローウル」「ガンス」「オタエガタイ」。これらは母や父に聞くと知っていたので一世代前に主に使われていたものだろう。

驚いたのが広島と言っても地域によって方言が分かれるということだ。小さい時に使っていた言葉で「ののさま」というものがある。これは周りの大人が使っていたため、まねて仏様のことを呼んだ言葉だ。しかし、友達に話すと分からないと言われた。友達と同じ広島県出身だが、仏様のことを「まんまんさん」と呼んでいたらしい。私は呉に住んでいるので、ここで初めてこれが呉弁だと知った。広島弁だけでなく、そこから私は呉弁も使っていたと知るとなんだかとても田舎者みたいに思えて面白かった。私はいつの間にか友達と方言について話すのが楽しくなっていた。

私が広島弁を使わないように他人に見えてしまうのはテレビに起因するのかもしれない。私は小さいころから親が共働きで家ではテレビばかり見ているテレビっ子だった。先生がおっしゃっていたがメディアの普及で方言は昔に比べてかなり減ったらしい。テレビばかり見ていた私は他人より標準語に触れていたと思う。だから他人よりあまり使わないのかもしれない。メディアの普及により標準語化が進み、方言が失われていることは事実だ。しかし、先生は完全になくなるのではなく、変化して残るものやイントネーションは変わらず残るだろうとおっしゃっていた。実際、私は広島弁を使っていないように見られるが、しっかりと使っているイントネーションもばっちり広島だ。

だからもし今度そんな風に言われた時は「ぶち」や「じゃけん」を乱用せず、「実は気づいてないかもしれないけど『のいて』や『みやすい』も広島弁なんだよ。標準語だと思っけていても方言だと意識していないだけでうちらはみんな方言を使っけるんだよ。」

と言いつけてやろうと思う。別にわざと寄せなくたって方言は使っけるし、使っけてないかもしれないと考えるのは杞憂だ。そうだ、私たちはみんな方言人だ。

<講評>

選者は、子供時代に東京から福岡の筑後市に引越したことがある。筑後弁には悩まされた。こちらの喋ることは伝わる。テレビの言葉に近いから。相手の言っけることがわからない。「とっ」となんてわかりますか？このエッセイが面白いのは大学での学びと実生活がリンクし、それがさらなる知的好奇心を呼び覚ますところにある。この作品では、方言を通じ、地元理解を深めてゆく過程が無理なく描かれている。方言コンプレックスがあると自認している筆者が最も素直に方言を受け入れている点に好感が持てる。むしろ筆者が方言は地域の宝ですよと読者に訴えけるようにすら感じられる。特に、筆者が持つ方言コンプレックスについて、自分自身のコンプレックスを対象化するプロセスが綿密に描写されているユニークな作品である。そのプロセスは、自分を取り巻く周囲の人の反応の観察、

子ども時代の暮らしの振り返り、さらに自分自身の大学での学びと関連づけられ、コンプレックスがむしろ自分のアイデンティティとして意識されていくその展開の描写が興味深く、秀逸な作品であると評価される。

エッセイコンクール審査員／富岡 治明・永田 彰子・吉目木 晴彦・大庭 由子・高田 厚